

原爆文学研究会報

第五三二号

原爆文学研究会 二〇一七年十二月

二〇一七年ワークショップと陝川（ハプチョン）スタディツアー

二〇一七年九月末、原爆文学研究会の川口隆行さんのお誘いを受け、嶺南大学校（慶尚北道慶山市）でのワークショップと、韓国慶尚南道の陝川を訪ねるスタディツアーに参加させていただいた。日本や米国、台湾からの参加者は二〇人ほどだったようである。

国際ワークショップ「東アジアから原爆文学を読みなおす」（韓国語では「原爆文学を東アジアの観点から読む」）は二十九日、嶺南大学校人文学事業団東アジア平和学チーム主催、当研究会と大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスターの協賛で開かれた。午前中には、宇野田さんの提供により、NHK広島制作のドキュメンタリー「最期に綴ったヒロシマ：ある韓国人被爆者の遺言」（四九分、二〇〇二年）を見た。広島で被爆した陝川出身の李順基さんと、李さんの闘病に寄りそう、日本人医師で被爆者の丸屋博さんを追ったものである。

ワークショップは、川口隆行「原爆文学研究の現状と課題 東アジアという視座から」、宇野田尚哉「原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者 御庄博実の詩業を中心に」、李文茹・曹銘根コメント、金文柱「記憶の政治学と国境を消す苦しみの連帯」、村上陽子・権赫泰コメント、総合討論という流れだった。議論では、「軍艦島」などの作品をめぐる評価も白熱し、冷戦体制の中での原爆や核をめぐる言説のナショナルな（想像力の）限界、ワークショップの枠組みである「東アジア」という設定の内実の問題（中朝の被爆者などを含め）なども指摘されたように思う。翌日、陝川へと向かったが、韓国原爆被害者協会の事務局長韓正敦さん（被爆二世）から、活動のことなどのお話をバスの中でしていただいた。陝川には一九九六年に原爆被害者福祉会館が日本政府の支出もあ

り完成していたが、今年八月に原爆資料館ができた。韓国原爆被害者協会の陝川支部長である沈鎮泰さんから、原爆資料館開館の経緯などのお話をさせていただき、二階の資料室の史資料を見せていただく。過去の諸団体が残した調査報告書が保管され、沈さんたちが労を惜しまず収集されたことが伝わった。また、『한국인 원폭피해자를 아시나요?』（韓国人原爆被害者をご存知ですか？）（陝川原爆被害者福祉会館編、二〇一六年）という冊子をいただいた。京都で生まれ、広島に住んでいた金さんのお話も載っていた。ノートに「金日祚、松本君代」という名前を書かれた。十七歳くらいで江波で被爆され、広電の車掌もしたことがあると日本語で教えていただいた。また辞書を引きつつ読みたい。福祉会館の側には、日本の宗教団体が出資した慰霊閣が立ち、中には多くの位牌が安置され、その前で、慰霊の舞が秋の空のもとで舞われた。その後、韓さんの案内で、近くの被爆二世のお宅にお邪魔させていただいた。

大邱に戻った後は、旧都心空間にある、大邱第一教会、ヒウム日本軍「慰安婦」歴史館（一九二〇年代の日本建築を再利用）、華僑学校や三中井百貨店大邱支店跡などを訪れた。大邱を離れる日、地下鉄に乗ろうと中心部を歩いていると、慰安婦像があった。帰国後、宇野田さんが触れた丸屋博・石川逸子編『在韓被爆者の手記 引き裂かれながら私たちが書いた』（西田書店、二〇〇六年）を見ると、ドキュメンタリーに登場した李順基さんのみならず、中国湖南省出身で広島監獄で被爆した張文彬さんの手記も載せられていた。崔範洵さん（嶺南大学校）のコーディネートに大きく負った学習の旅であり、宴会酒席の場も毎日設けられて、非常に密度の濃い二日間だった。

（中村 平）

第五三回 原爆文学研究会報告



二〇一七年九月一六日（土）、広島大学東千田未来創生センターにて第五三回研究会を開催しました。市田真理氏の研究発表については手紙が具体的にどのような地域から寄せられているのかという質問がありました。これに対し、市田氏からは、国外だけではなく海外も含めて多様な地域・国籍・立場の人々からの手紙があったという応答がありました。また、久保山愛吉さんの直接の死因についての当時の報道がどのようなものだったのかという質問もありました。これについては当時の報道では久保山さんの死について医療関係者から様々な説が出されたこと、久保山さんの死を被爆によるものではなく輸血時のミスによる感染症なのだと言いたいアメリカ大使館を刺激したという説明が市田氏よりありました。また、後年行われた調査でも久保山さんの死に放射能が影響していることが明らかであるという補足もありました。

宮川健郎氏の研究発表に対しては那須正幹の理想主義の中身について詳しく知りたいという質問がありました。これについては、宮川氏より七〇年代以降の児童文学において、散文性が獲得されていくなかで理想主義的な結末がつけられなくなっていく傾向が顕著になったという説明がありました。また、そのような状況において理想主義をいったん括弧に括ろうとしたのが那須正幹であったという点も強調されました。そのほか、翻訳作品における核戦争の表象やSF作品の現代児童文学の影響について、そして児童文学を通して子ども読者にどのように戦争体験をどう伝えていくことができるのかという問題などについても活発な議論が交わされました。

「原爆文学」再読5―林京子「再びルイへ。」の総合討論でも様々な発言があり、林京子作品におけるジェンダー・セクシュアリティをどう捉えるべきかという問題や、林京子のブラックユーモアについて、「ルイ」という人物のモデルや名付けの意図などについて議論が展開されました。村上氏からは林京子作品の傾向や内容に基づいた応答がありました。また、島村氏からは生身の作家としての林京子との対話に基づく貴重なエピソードや、報告のなかでは触れられなかった今後の課題についても語っていただきました。「再びルイへ。」の総合討論については『原爆文学研究』第一六号でより詳細に報告しておりますので、そちらもぜひご参照ください。

◇ 研究発表1

第五福竜丸・久保山愛吉さんとその家族に 寄せられた3000通の手紙

市田 真理

私が在職する公益財団法人第五福竜丸平和協会（以下、協会）は、都立第五福竜丸展示館を東京都から委託され管理運営している。展示館が開館する一九七六年、第五福竜丸無線長で被ばく半年後に亡くなった久



保山愛吉氏の遺族より、手紙類約三〇〇〇通の寄贈を受けた。長岡弘芳、近藤弘、加納竜一らによって整理が行われ、協会編『ビキニ水爆被災資料集』（東大出版会）にその一部が所収された。七九年〜八〇年にはまた協会の定期刊行物『福竜丸だより』でも内容が紹介されるとともに、差出人の調査を行ったことなどが記録されている。また一部は常設展示されている。

れている。

いわゆる「ビキニ事件」では、第五福竜丸以外の漁船も放射能汚染魚を廃棄するなどの被害に遭っており、乗組員たちの健康調査も継続しては行われなかった。日米政府による「見舞金」決着により、被害を声高に叫んでも十分な補償を受けられず、むしろ「被ばく」という差別に直面することから、被害者は沈黙し、第五福竜丸乗組員たちと久保山氏遺族には羨望・嫉妬からくる誹謗中傷がぶつけられた。

私がこれらの手紙を再整理し、何らかの形で公表したい旨を知らせたところ、久保山氏遺族には「そつとしておいてほしい」と告げられたものの、久保山愛吉だけを特別視することなく、事実と向き合うのならば、これらの手紙を素材にしたものを世に出す許可を得た。同時に久保山氏以外の被害（者）についても研究することを約束させられた。手紙を書いた当時の人びとの心情に思いを馳せることで、その約束を果たすことができるだろうか。

手書きの文字には表情がある。また選ばれた便箋が少女雑誌の付録であったり、ワラ半紙の両面に書かれた寄せ書きであったりすることから差出人の暮らしぶりを想像する。宛先住所が不完全であるにもかかわらず、届いていることにも気づく。差出人の中に敬愛する人の名を見つけ、

著名人や政治家、入院先から、獄中から、海外から手紙をしたためた未知の人物に思いを馳せる。

孤独な整理作業ではあるが、研究会で報告させていただいたことで、無意識に読むことを避けてきた手紙（海外からのもの、中傷が書かれているものなど）や、地域的な特徴の整理が必要なこと、学校単位で出された手紙の教師の関与など、あらたな切り口を多数ご教示いただいた。手紙を読み解くことで「ビキニ事件の時代」の匂いに近づき、現代社会を照射することができれば、と密かに目標を立てている。

◇ 研究発表2

那須正幹と原爆

——『〈原爆〉を読む文化事典』・「教育と原爆児童文学」補遺——

宮川 健郎



刊行されたばかりの『〈原爆〉を読む文化事典』の「教育と原爆児童文学」の項目を執筆した。書いたことをもう少し深めたい。

事典に引用した住田勝の論文「断絶から対話を拓く戦争児童文学の可能性」は、今西祐行の「ヒロシマのうた」について書いている。「問題なのは、こうした原爆物語が、必ず同じテーマに向かつて集約していくことであろう。子どもたちのなかのスキーマの最上位には「原爆はいけない」という揺るぎないテーマが置かれているはずである。だから、原爆を取り扱った文学に触れるとき、多くの子どもが、おなじみの、完

全にパターン化した読みの枠組みを適用する。」住田は、「単一の「声」によって語り抜かれる物語を、多声化する」ことを提案するが、事典でも言及した那須正幹こそ現代児童文学の「決まりきった物語」を逃れようとした作家だ。一九六〇年前後に出発した日本の現代児童文学は、子どもをめぐる問題は子どもの力によって必ず乗り越えられ、状況は変革できるという「理想主義」で書かれていた。那須正幹『ぼくらは海へ』（一九八〇年）は、困難な現実を逃れて、ちっぽけないかたで海へ出て行ってしまう少年たちを描く。ここには、「理想主義」の考え直しがある。

那須の原爆を描いた作品にも、「決まりきった物語」を相対化する力が強くはたらいっている。事典でも取り上げた『屋根裏の遠い旅』（一九七五年）では、「太平洋戦争に勝利した日本」に迷い込んだ少年たちの視点から、「戦争に負けた日本」を見直す。

一九四二年に広島で生まれ、三歳で被爆した那須にとつて、佐々木禎子は「もうひとりの私」にほかならない。ノンフィクション『折り鶴の子どもたち 原爆症とたたかった佐々木禎子と級友たち』（一九八四年）の第二部では、「原爆の子の像」を建てる運動の推移を徹底して禎子の級友たちの立場から時に批判的に描く。

『絵で読む 広島原爆』（西村繁男絵、一九九五年）は、一九二九年の世界大恐慌から説き起こして、原爆を世界的な視野でとらえ直す。子どもたちによく読まれた『ズッコケ三人組』シリーズでも、原爆は書かれた。『ズッコケ時間漂流記』（一九八二年）の江戸時代からやってきた若林雪子先生は、「一九四五年八月六日。若林家は広島市に住んでいました。」「若林家の血筋は、あの日のうちに絶えてしまいました。」という。

短編『The End of the World』（一九八四年）では、核戦争後の世界での心のきずなを描く。ここに、那須の「理想主義」がある。

◇ 「原爆文学」再読5―林京子「再びルイへ。」
林京子 「祭りの場」から「再びルイへ。」
まで

村上 陽子



本報告ではまず、林京子のデビュー作「祭りの場」（一九七五年）に寄せられてきた評価の変遷をたどった。記録を小説に取り入れながら原爆投下を描く「祭りの場」の手法は、実は同時代において必ずしも高い評価が与えられたわけではなく、戦後三十年の節目の年に登場した長崎原爆の「記録」として評価される一方で、「小説」としての完成度や強度を保ち得ていないという批判も同時に浴びせられた。

一九八〇年代になると、「祭りの場」の「小説」としての統一性や完成度に疑問を付す傾向が持続されながら、被爆の当事者／非当事者間、あるいは被爆者間の差異が問題となりはじめる。「祭りの場」を優れた文学作品として捉え直し、評価する研究があらわれはじめるのは二〇〇〇年代以降である。

以上のような「祭りの場」への評価を踏まえた上で、東日本大震災後に発表された「再びルイへ。」（初出『群像』二〇一三年四月）の考察を進めた。東日本大震災直後にはインターネット上にさまざまな情報があふれ、大手メディアの報道が限定的であったり、信頼できなかつたりするなか、多くの人がインターネットで情報を発信・受信し、市民レベル



林京子の「再びルイへ。」には、「3・11」東日本大震災が勃発した瞬間の記述がある。そして以後この小説では、この大地震が引き起こした原子力発電所の事故のもたらした、さらにも取返しのできない事態への、絶望的な思いが書き綴られることになる。この作品に現れている「目前の冷徹な現実」の認識と、その現実から一種

◇ 「原爆文学」再読5―林京子「再びルイへ。」
「再びルイへ。」から「祭りの場」へ／
「祭りの場」から「再びルイへ。」

島村 輝

での情報交換が進んでいた。一方、身近な人との関係において原発事故への不安や危機感を吐露できないという〈空気〉も生成されていた。「再びルイへ。」では震災後の状況のなかで信頼できる友人たちとの二者間の応答として震災後の言葉や状況を共有することの困難が描かれた。「再びルイへ。」の主人公である「わたし」は、原発事故に対する政府の対応や友人たちとの温度差に傷つくが、脱原発集会への参加を通して未来への希望をつないでいく。原発事故を自分の問題として感じ取り、行動する人々の間に身を置きながらも特定の友人たちとの二者間のコミュニケーションが重ねられていくとき、お互いの関係性や立場は少しずつ変化していくことになるという「再びルイへ。」の可能性を示した。

の「距離」をとることで、それらが重層して脳裏に頭れ、イメージを構成するという書法こそ、事実上の文壇デビュー作「祭りの場」から、最晩年の「再びルイへ。」に直結する、林京子の小説作法の核心に位置するものではないかと考えられる。

「祭りの場」という小説において、一つの場面と前の場面とのつながりは、わかりにくい場合もある。その核心にあるのが、「客観性」と「距離感」の複合的コントラストともいうべきものである。正確・精密な描写の直後に、冷徹・皮肉な批評性に満ちた感想が挟まれる。そのことによつて、場所・人物が「異化」され、映写された幻燈画のような心象風景が現れてくる。原爆被爆の強烈な体験がもたらした、一種の「離人症」的なイメージといっても良い。ありありと印象づけられる細部の描写や、独特の小道具類の使用をつうじて、幻想的ともいえる場面を作り出し、見ている風景と書いている自分を切り離してしまう。これが林京子の方法であり、そのことによつて彼女独特の強度を備えたことばが紡ぎ出されるようになっていく。

「再びルイへ。」もまた、そうした方法が現れている作品といえる。林が直面したのは、言葉を生業とし、言葉によつて立つ作家・文学者として、あまりにも絶望的であり、目前の事実として即時的に受けとめ、記述することができないほどの事態であった。「命一つ」という地点に還ること、「祭りの場」の原点に戻ろうとすること以外に、彼女の選べべき道はなかった。そのようにして二つの作品はループを閉じるように結びついている。選択の余地のない厳しさのなかから、世を去るその時まで、凜として林京子が示してくれたことは、隣国の水爆実験と、それに対する過剰なまでの威嚇のエスカレーションの狭間で、希望を見出しがたい状況にある今日の私たちに対する、かすかでも確かな、希望の道筋だったのではないだろうか。

彙報

第五三回 原爆文学研究会

○日時 二〇一七年九月一六日(土)

○会場 広島大学東千田未来創生センターM二〇四講義室

○研究発表

発表1 第五福竜丸・久保山愛吉さんとその家族に寄せられた300

0通の手紙

市田 真理

発表2 那須正幹と原爆―『〈原爆〉を読む文化事典』・「教育と原爆

児童文学」補遺

宮川 健郎

○「原爆文学」再読5―林京子「再びルイへ。」

発題者 島村輝・村上陽子

機関誌 「原爆文学研究」 第一七号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一七号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一八年

九月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付し

ての投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇

〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 千六五一―二一八七 神戸市西区学園東町九―一

神戸市外国語大学 山本昭宏研究室

編集後記

九月は第五三回原爆文学研究会、同月末に韓国で開催された国際ワークショップ、^{ウチコン} 陝川を訪ねるスタディツアーと、得がたい学びの機会を得られた月でした。特に陝川では、長く語られることのなかった原爆の記憶をたぐりよせ、伝えていくことの困難に直面させられたように思います。しかし同時に、それに挑もうとする人々の活動がもたらす可能性や、今後その取り組みが広がっていくことへの希望も感じさせられました。第五三回原爆文学研究会での報告内容をお寄せいただいた報告者のみなさん、巻頭エッセイで韓国の旅についてご報告くださった中村平さんに心よりお礼申し上げます。

次回の第五四回原爆文学研究会は二月二三日(土)、広島市の広島大学東千田キャンパス東千田校舎A棟二〇七講義室にて、午後一時より開催されます。齋藤一さんの研究報告「ヒロシマの「荒地」―ステイブン・スペンダーの広島講演会(一九五八年)を中心に」のほか、『〈原爆〉を読む文化事典』の刊行記念ワークショップが企画されています。東琢磨さん、権赫泰さん、伊藤詔子さんが書評者として登壇され、編者の川口隆行さんからのリプライが予定されています。会員のみなさまのご参加をお待ちしております。(村上陽子)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四―〇一八〇 福岡市城南区七隈八一―一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>